

リーディング・マラソンによる多読指導実施報告 ～チバセルハイの取り組みの一環として～

県立成田国際高等学校 岩田 純一

（１）多読指導導入の経緯

本校では、平成14年度から16年度まで文部科学省からスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールの指定を受け「英語科の専門科目と他教科の科目を関連づけた指導等により、英語によるコミュニケーション能力の伸長を図る指導方法の研究」を研究開発課題として3年間研究を行った。その反省の一つが「コンテンツベースの授業やディベートの取り組みは、中～上位層の生徒の英語コミュニケーション能力、特にスピーキング・リスニング力の伸長につながったが、より多くの生徒に対して、その効果を求めるためには、英語の基礎力の充実が必要である」というものであった。

そこで、平成17年度から19年度まで県教育委員
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
ゲージ・ハイスクールの指定を受けた際に、「多読と多聴による英語基礎力の充実」を研究課題の一つとし、「生徒が1・2年次に自分の力に合ったグレイディッド・リーダーを自分のペースで読み進める『リーディング・マラソン』の実施」を方策として打ち出した。リーディング・マラソンの指導も今年度で3年目が終わり、本校の多読指導もようやく基本形が完成した感がある。

本稿では、現在のところの完成形とも言える19年度リーディング・マラソンの実施形態を紹介させていただきたい。

（２）平成19年度リーディング・マラソン概略

対象：1・2年国際科6クラス生徒（約240名）と
普通科希望者（本稿では国際科生徒対象の実施
方法に絞って報告）

多読用図書：多読指導も3年目となり、英語科準備室に設置されたReading Marathon Libraryの貸し出し用図書も、各社グレイディッド・リーダーを中心に、子供用の絵本から一般の洋書まで合わせて1000冊を越えている。

それらの図書は、生徒が自分に適したレベルの本をさがしやすいように、語彙レベルなどから判断した本校独自の7つのレベルに分けられ、それぞれステッカー色で区別されている。さらに、表紙には総語数と、過去に読んだ生徒の評価が高かった本はNarikoku Reader's Ratingとしてその評価が表示されている。



〈多読入門用図書〉



〈休み時間貸し出し光景〉

手順：

- ①英語科準備室のReading Marathon Libraryから本を選び、貸出簿の自分の欄に本を借りた日付と本のタイトルを記入する。
- ②読み終わったら、全員に配布されている多読手帳に必要事項を記入。さらにBook Report用紙に必要事項を記入。教室に掲示されているReading Marathon Progress Chartの累計語数

も更新する。

- ③返却する本にBook Reportをはさみ、英語科準備室Book Return Boxに返却、貸し出し簿に返却日を記入する。
- ④記載事項確認、捺印後に返却されたBook Reportは多読手帳と共に保管する。
- ⑤年間何回か指定された期日には、多読手帳とBook Reportを提出する。最終目標は、1年生は6万語、2年生は8万語である。
- ⑥さらに、2年生は、読んだ語数の合計が5000語を超える度に、それまでに読んだ本の中から1冊を選び、ALTとBook Reviewインタビューを行う。ALTに評価とサインを記入してもらい、Book Review Sheetを提出する。

〈Book Report〉

Class	G	No	12	Name	Yu Kato
Title	SHERLOCK HOLMES				
Book Level	1	②	3	4	5
Rating	★	★	★	★	★
Word Level	1	2	3	④	5
Newly Learned Impressive Word(s) No, He listened to you - and everybody makes mistakes.					
Outline シェーロック・ホームズはイギリスの有名な探偵。助手のワトソンと事件を解決していきます。ある日若い女性が婚約者がいなくなったと言って2人のもとを言いあててきますが、他にも2つの謎が入っています。					
Book Review 有名なシェーロック・ホームズの話でよかったです。話も3つ短い物語にわかれているから読みやすかったです。推理小説が好きな私にもおすすめです!!					

Book Level

- 0 No sticker (Snail)
1 Blue (Turtle)
2 Yellow (Koala)
3 Red (Panda)
4 Green (Rabbit)
5 White (Horse)

Rating

- ★★★★★ お勧めしない!!
★★★★★ あまりお勧めしない!
★★★★★ 普通
★★★★★ お勧め!
★★★★★ とてもお勧め!!

* 4 ユーザー / 5 ユーザーは巻末の読者評価 (Readers Rating) に反映されます。

Word Level (わからない単語の数)

- 1 非常に多く内容理解ができなかった。
2 多くて内容の理解に苦労した。
3 所々あったが内容は理解できた。
4 少ななくて内容を理解しやすかった。
5 全くなくて内容を完全に理解できた。

1年間の流れ：1年間の流れを1年生を例にとり紹介すると次のようなものである。

4月	・実施方法の徹底と動機付けを目的にオリエンテーションと出版社ELTコンサルタントによる「特別授業」を実施
5月	・開始直後の語彙力測定のための第1回語彙テストを実施
6月	・意識調査を目的に第1回アンケート調査を実施 ・全員10,000語読了(6/25)
7月	・全員15,000語読了(7/20)
8月	・全員25,000語読了(8/28)
10月	・第2回アンケート調査と語彙テストを実施・全員30,000語読了(10/9)
11月	・全員35,000語読了(11/9)
12月	・全員40,000語読了(12/21)
3月	・第3回語彙テストを実施・全員60,000語読了(3/10)

(3) 語彙力の推移

独自語彙テスト

多読による語彙力の変化を調べる目的で、Penguin Readers レベル2～6の各レベルで使用されている語彙(動詞・名詞・形容詞)を分析して本校独自に開発した語彙テストの結果である。

〔H. 19年度1年生 レベル別平均点の推移〕

	1 回 (5月)	2 回 (10月)	3 回 (3月)
レベル2	10.8	12.1	13.8
レベル3	5.3	6.4	9.2
レベル4	2.0	3.3	6.0
レベル5	1.4	2.2	3.3
レベル7	0.8	0.9	2.2
合 計	20.3	24.9	33.8

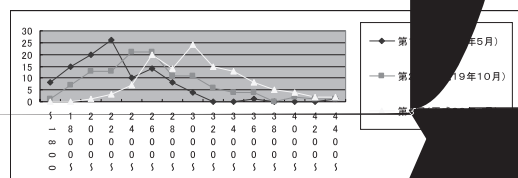
現1年生のレベル2～4という基礎的なレベルにおける平均の上昇は順調で、過去の学年の同時期の伸びをも上回り、多読による成果が特に基本語彙に表れていると考えられる。ただし、レベル5・6に関しては、あまり改善が見られないのは、

読む本のレベルが基礎的なものから先
ないことが原因であろう。

望月テスト

望月テストは、英語のリーディング能力を測定するテストである。本校では、
6000語レベルのテストを用いて、各生徒の英語力
彙数を算出している。

〈H. 19年度1年生 推定語彙数の分布〉



度数分布の山全体が右方向に移動
順調な推移が見られるが、特に多読
語以下のレベルにいた生徒のレベ
に認められ、多読指導が、特に
生徒の語彙習得に有効であること

〈H. 19年度1年生 推定語彙数〉

	第1回 (5月)	第2回 (10月)	第3回 (3月)
推定語彙 数 平均	2215.3	2643.4	3157.2

18年度に当時、本校で実施した調査により、
ベーストの授
必要となる
推定語彙
わかってい
る。(18年
時の推定語彙
数平均は
「ALTによる英
語による授業」に備え、次
年度中
語彙数をそれに近づけ
るこ



〈多読〉



〈Longman 社ELTコンサルタントによる特別授業〉

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 蔵書管理の徹底と生徒がいつでも自由に本を手にとって選ぶことができる環境は、完全に矛盾する。どちらを優先するべきか悩んでいた我々にとって大きな示唆を与えてくれたのは、あるワークショップで聞いた「毎年本の10%はなくなるもの」〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 言葉であった。それを覚悟しなければ多読プログラムは続けられないということであり、その程度の犠牲は払っても多読プログラムは十分価値のあるものだということである。

幸い今のところ本校では蔵書の散逸は大きな問題とはなっていない。これは、本の返却と評価の基となるブックレポート提出を同時にすることを徹底していることも大きな要因だろう。また、年に何回かは定期考査時を利用してすべての本を返却させる期間を設け、その折に生徒達には、多読用図書がいかに貴重なものであるかとい 話をするようにしている。普段は多くの本が貸し出され隙間の目立つ本棚に、収まりきれないほど多くの本が戻ってくるのを見ては、生徒達の良識に感謝している。

多読指導成果の検証

今回の多読指導で最も苦勞したのが、多読指導の成果の検証である。TOEICやG-TECのリーディングセクションの平均スコアには、多読指導の成果は、なかなかはっきりとは表れなかった。これは、多読に適した易しいレベルのグレイディッド・リーダーを読むことで身に付く力と、これらのテストで評価される力が必ずしも一致していないからであろう。多読の成果は有機肥料のように長い期間をかけて表れるもので、化学肥料のような即効性を期待することはできないようだ。中には多くの語数を読みこれらのテストの成績も上がっている生徒もいるが、そのような生徒は、多読以外の英語学習にも積極的な生徒で、彼らの成績の上昇を多読の成果とは言い切れない。これが、純粋な研究とは異なる学校現場における研究の苦しいところである。

そのような状況で、運営指導委員の先生方からいただいたアドバイスは、「テストのスコアだけで成果を検証しようとしなくてもよい」ということであった。アンケート結果や生徒への聞き取り調査、目を輝かせて本を読む生徒の様子も立派な評価の判断材料となるということであった。

これらテスト以外の判断材料に加え、本稿でも紹介した速読テストなど簡単に実施可能なテストを利用する方法も更に研究しつつ、多読により身に付いた力をTOEICやG-TECなどのスコアに表れる力に転化させていくことが今後の課題である。

終わりに

冒頭にも紹介したように、この多読指導は、県教委指定チバ・スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールとしての研究課題の一つである。この場を借りて、本校にこのような機会を与えてくれた関係者の皆様、3年間に渡り指導・助言を下された運営指導委員の先生方に感謝申し上げます。